

#ユースサポート

16,17,18... 第6号



2022年 2月20日
特定非営利活動法人
ハイティーンズ サポート ちば
発行責任者 吉永 馨
[http:// hs-chiba.net/](http://hs-chiba.net/)

2月13日(日) 千葉大宮高校で食品配布実施！



2月13日(日曜)午前10時から、千葉県立大宮高校で食品の配布会が開催されました。生浜高校の居場所カフェを見学した先生方の発案で実現したものです。HSちばも全面的に協力し、フードバンク等を回り食品を用意させていただきました。この日は学習計画書作成の1日目。「何だろう？」と遠慮がちに覗き込んでいた生徒さんも、袋いっぱい食品を詰め込み満足顔。通信制高校で初の食品配布会。来場者は89名でした。次回は2月21日(月曜)に行います。

「若者はもっと大人に構ってほしい生き物」

NPO法人ハイティーンズサポートちば 理事長 吉永 馨

1月15日、東大付近で大学入学共通テスト受験生ら3人が刃物で切りつけられて重軽傷を負った事件で、殺人未遂容疑で高校2年生が逮捕されました。この事件について、東京新聞(「若者の声」)に投稿した高校生の岡田美苗さん(17)は、「独りで死んでくれ」「他人に迷惑をかけるな」という言葉が飛び交ったことに対して悲しくなった。なぜ死のうと思うほど追い込まれていたか考えるべきで、大人が心から苦しむ若者に助けの手を差し伸べないと“このような事件”はなくなる。若者はもっと大人に構ってほしい生き物だ、と述べていました。



事件から1週間後こんな記事を見つけました。「新型コロナウイルス感染拡大の長期化に伴い、若い世代の孤立が深刻な問題となっている。岡山県立岡山御津高校は生徒の孤立を防ごうと、昨年4月に校内カフェを始めた。2週間に1回、放課後に地域のボランティアが来校し、菓子や軽食を片手に生徒と交流する。」(日本経済新聞1月22日)

新型コロナが長引く中で、校内居場所カフェは高校生の心のケア・サポートにつながっていきます。ハイティーンズサポートちばは、若者支援の一つとして校内居場所カフェ設置に積極的に取り組んでいきます。

校内居場所カフェに県予算！

2022年度千葉県当初予算案 「高校生の居場所設置・相談支援」750万円

2月2日、千葉県の2022年度当初予算案が発表され、新規事業の一つとして「課題を抱える高校生の居場所設置・相談支援事業」として750万円が計上されました。

これは、昨年7月、県立高校2校でスタートした校内居場所カフェの実施、そして、高校生世代への支援、校内居場所カフェの必要性を訴えてきたHSちばのとりくみが実を結んだものです。

HSちばの役割はますます大きくなっていきます。引き続き、地域の方々との協働で居場所カフェの開設・運営にあたります。

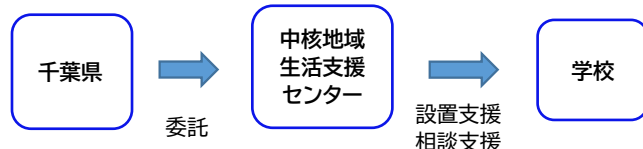
○課題を抱える高校生の居場所設置・相談支援事業【新規】(健康福祉指導課) 7,500千円

貧困や家庭環境など様々な原因により困難な状況にある子どもを早期に発見し、福祉的な支援につなげていくため、中核地域生活支援センターと福祉団体等が連携して校内に気軽に相談できる居場所を作ります。

【実施場所】 県内の高等学校5校(予定)

【委託先】 実施地域に設置されている中核地域生活支援センターの受託事業者

【事業内容】 実施校ごとに月1回程度開催する居場所づくりの事業について、参加団体の手配や広報等の開催準備を支援するとともに、開催経費への助成(1回あたり上限5万円、1校につき2年間に限る)や当日の子どもの相談対応を行う。



高校居場所カフェ、実現しました！

～地域の力で若者支援を！～

昨年7月14日、千葉県初の校内居場所カフェが開設され、10月以降ほぼ月1回のペースでカフェを実施してきました。カフェは、地域の若者支援団体、社会福祉協議会ははじめ多くの方々によって運営されています。中でも、大学生の参加はカフェの大きな力となっています。そこで今回は、カフェスタッフとして参加する大学生のレポート、運営に関わっているの方々によるパネルディスカッションを開催し、居場所カフェの意義と課題について意見交流しました。



○シンポジウムのパネラーの方々(敬称略)
左から、宮内渉(HS ちば理事)、隈本邦彦(江戸川大学教授)、田中照美(TSUGAノ わ子ども食堂主宰)、石橋正治(生浜高校教員)

第1部 学生ボランティアのレポート ～居場所カフェに参加して～

□「生浜高校居場所カフェ活動報告」より

淑徳大学社会福祉学科 松本萌々香さん

○居場所カフェが必要とされる理由は？

①学校と利害関係のない第三者である“大学生”が生徒の悩みを汲み取り、寄り添うことが出来れば、一人で苦しむ生徒は少しかもしれないが減っていくと考えられる。②悩みを話す事はできなくても、他愛もない会話をすることで、気持ちが楽になることもある。

○カフェにはどのような生徒が来るの？

食料配布が目的の生徒もいるが、大学生との交流が目的の生徒もいる。中にはこんな生徒も一。

ライトルームにも来なければ SC、SSW へ相談にも来ない生徒、教室では必要最低限しか会話せず、担任の先生も多くは話したことがない生徒・・・

* SC ; スクールカウンセラー、

* SSW ; スクールソーシャルワーカー



□「りりいふカフェへのゼミとしての取組み」より



江戸川大学メディアコミュニケーション学部 マスコミュニケーション学科 隈本ゼミの皆さん

ゼミの目標は、世の中の社会問題

を現場で取材し、マスメディアが伝える情報内容を検証すること。今年のテーマはコロナ禍での新たな貧困問題。校内居場所カフェづくりを応援しながら取材することに。

○生徒とのつながりが

軽く進路相談をしてきた男子生徒、顔を覚えていてくれた生徒もいた。

○一方で課題も

- ・ 定時制の生徒たちの参加が少ない。
- ・ 楽しい雰囲気を作られたが、ゆっくり話す時間や雰囲気がない。開催時間やイベント内容に改善の必要がある。
- ・ 高校の先生たちから冷たい視線も。先生方のご理解、協力を得る必要があるのではないか。



第2部 パネルディスカッション ～居場所カフェ～限らないその可能性～

□隈本邦彦さん(江戸川大学教授) 市川工業高校「りりいふカフェ」運営に参加

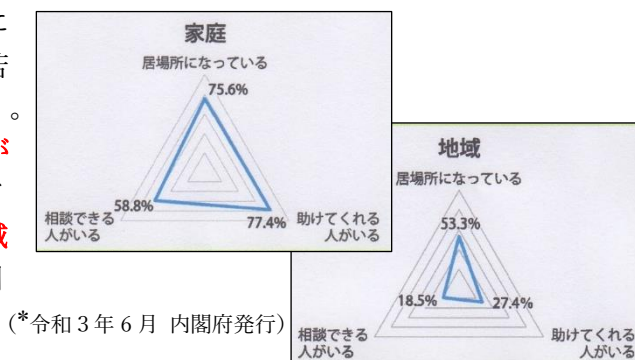
家庭でも学校でもないサードプレイスが必要とされる。高校生くらいになると地域の居場所に行くのは抵抗があるが、校内なら行きやすい。いわば2.5 的プレイスとして「校内居場所カフェ」の意味がある。運営は高校ではなく地域の支援団体のボランティアや学生たちであることが重要だ。

7月、市川工業高校「りりいふカフェ」がスタートしたが、必ずしもうまくいっているとは言えないところもある。全日制の先生方から「何なの？」と見られている。学校の見えない壁があるのか。

□田中照美さん(TSUGAノ わ子ども食堂主宰) 生浜高校「ライトカフェ」運営に参加

新型コロナの影響は深刻で若者の自死も増加。特に女子中学生、女子高校生の増加が顕著。高校生、若者への支援が必要だ。改善のキーワードは「居場所」。

「子ども若者白書*」(右図)によれば、「**4人に1人が家庭を居場所と思えない**」。また、地域を居場所と感じている子どもは学校よりも多いのに、相談できる人や助けてくれる人が「**地域の中にはいない**」と感じている。一方、SNS、インターネット空間への依存は、こども達を犯罪へと巻き込む温床にもなっている。



(*令和3年6月 内閣府発行)



□石橋正治さん(生浜高校教員) 高校生にもなるとSOSを自分で発信するのは氷山の一角。多くは黙って重荷を背負い、あるいは支援が必要な状態であることに気づいていない。一見何の問題もないように見える、何も言わない多くの生徒の中に、本当に支援すべき生徒がいる。だからこそ裾野は広くなければいけないと思う。きっかけは「食べ物目当て」でも「素敵な大学生がいる」でも何でもいい。どんな形でもいいのでその生徒をカフェに呼び、教員ではない様々な大人との繋がりを作り、そこから時間をかけて関係を深める中で彼らの本音をすくい上げる。時間と回数を重ねた分だけカフェに近づく。

生浜高校「ライトカフェ」の報告

プレオープン(7/14)以降のカフェ実施について

生浜高校 石橋 正治

10月以降もコロナ禍での実施となりました。議論を重ね、コロナ禍で出来ること、コロナ禍だからこそやるべきことの和集合の中にカフェのあり方を模索、具体的には、目的①コロナ禍で極度に制限された日常生活で精神的に追い詰められた生徒の不安やストレスの軽減、目的②コロナ禍による急激な家計悪化で生活困難にある生徒の緊急支援を二本柱とし、カフェとして実施しました。

○第2回 10月25日 目的①② + 食品ロスを考える フードバンクちば参加の全校フードドライブ

○第3回 11月14日 目的①② + 地域子供会・婦人部参加 専門相談員2名参加(上写真)

○第4回 12月8日 目的①② + 一方通行解除 地域子供会・婦人部参加 専門相談員5名参加



目的①の対応 カフェで大学生・NPOスタッフと過ごす自由時間。ゲーム、雑談、真剣な相談をするもよし。学校には話したくないことも、同年代には気を遣って疲れてしまう生徒も、大学生の前では安心して心の奥にしまい込んだ本音を吐く。これが利害関係のない信頼できる大人、いわゆる「斜めの位置」に存在する大学生の奇跡の立ち位置です。コロナ禍の折、不安や心配事をひとりで抱え込んでしまうと、深刻な自己否定に陥ります。ここから抜け出す最善策は言葉にして吐き出すこと。相談することです。それをカフェスタッフが丁寧にすくい上げて繋いでいく。大学生約20名、NPOスタッフが対応します。また大学生だけではカバーできない専門的な相談に対して、その場で対応できる*専門相談員を3回目から配置しました。



目的②の対応 生活困窮支援の目的を表に出さず、フードロス削減の目的で、届いた食品をカフェで無料提供しています。また子ども食堂から熱々のホットク等を無料配布(テイクアウトのみ)。食品ロス削減月間である10月には、フードバンクちばのスタッフにカフェに参加してもらい、生徒・職員で全校フードドライブ。食品を提供するのも、きちんと消費するのも立派な社会貢献。実際に家計が厳しい生徒がいたとしても、そのことを知られずに、フードドライブ参加者として好きなだけ食品を受け取れるようにしました。食品を袋いっぱい詰め、スタッフに大きな声でお礼を言って会場を後にする生徒の笑顔を見ると、どうにも愛おしい気持ちになりました。

*専門相談員: ①スクールカウンセラー(精神的な悩み) ②スクールソーシャルワーカー(家庭の問題) ③コミュニティケア街ねっと(NPO。家計相談) ④介護の未来案内人(県庁健康福祉部。ヤングケアラー・介護についての相談) ⑤マザーズコンフォート(一般社団法人。女性に関する様々な悩み相談)

4回実施したことの意義として以下5点挙げられます。

- (1) 回を重ねるごとに徐々に生徒と大学生・NPOとの関係が自然に形作られ、話を聞いてくれた担当と再度話す目的でカフェを訪れる生徒が増えた。イベント目的の参加から人との繋がりを求めての参加に変わった。時間をかけて「イベント」が「居場所」に成長していくのだと思います。
- (2) 回を重ねるごとにスタッフ間の関係がより密接になり、生徒への対応について自然に連動するようになった。
- (3) カフェ終了後毎回1時間振り返り会を行い、フィードバックして企画に反映させた。専門相談員を配置した

- こと、大学生との相談の仕方の希望を生徒に聞くようにしたこと(楽しく話したい、または静かに話したい)等。
- (4) 地域の子供会担当や地域の婦人部のお母さん方計7名が3回目からカフェに参加した。その他にも新規の参加が決まっており、地域の企画として広がり始めた。
- (5) カフェで吸い上げた生徒の本音の中で、学校の体制について改善を促す必要がある事項を、職員会議で提案する予定である。

試行錯誤が続きますが、なんとかして子ども達の後押しをしていきたい、またあの笑顔が見たい、これがカフェスタッフの願いです。

「りりいふカフェと食支援」 ～少しずつみんなが繋がりはじめた～

市川工業高校定時制 長永 孝弘

1. 「このパン美味しいんだよね」（9月食支援）

緊急事態宣言の延長に伴い
9月のカフェは中止となり、
9月28,29日に食支援を実施
した。2日間に渡ったのも全
日制が学年ごと分散登校にな
ったからである。生徒さんが
密にならないようにスマホで時間帯を予約するサイトも
立ち上げた。配布の場所も食堂へ向かう通路に変更した。
米600kgを準備し、食品セットと共に配布した。特に



生徒と話す吉永理事長

2. 第1回りりいふカフェ

10月25日、第1回りりいふカフェが実施された。
10月のテーマは「ハロウィン」。そこで江戸川大学の
学生のみなさんをはじめ仮
装で出迎えることに。7月
14日のプレオープンと同様
に「縁日ゾーン」「くつろぎ
ゾーン」「食料配布ゾーン」
と趣向を凝らしたものとな
った。「縁日ゾーン」では新
たに射的が登場。生徒さん



「ビスコ」と「パンマルカン」（缶入りのパンで災害備蓄
品）の評判がよかった。私が生徒さんに歩み寄ると、「こ
のパン美味しいんだよね」と話しかけてきた。「それなら
余っているから持ってきたよ」といくつか手渡した。生
徒さんは「ありがとうございます」と嬉しそうに言った。
放課後部活もできず、友だちと一緒にいられる時間もし
ない緊急事態宣言下、食支援を通じて少しでも日常を取り
戻せたらと思った。こうして2日間で延べ220人余りに
配布することができた。嬉しそうな笑顔が忘れられない。

たちはお菓子を目指して盛り上
がっていた。



また、今回は初の試みとして
地元企業の方をお招きして就労
支援相談のブースが設けられた。

なかなかアルバイトが決まらない生徒さんが、このブ
ースで熱心に企業の方のお話を聞いている姿もあった。

食料配布の場ではダイバーシティ工房さんや市川市福
祉協議会さんのおかげで大量の食料が届けられた。延べ
定時制9人、全日制69人の生徒さんの参加だった。

3. 第2回りりいふカフェから食支援へ

12月21日、クリスマス为主题にりりいふカフェを
予定していたが、新型コロナの影響で食支援に変更にな
った。江戸川大学のみなさんにポスターやwebサイトを
作成して頂きながらカフェが実施できなかったことが残
念だった。今回は定時制の生徒さんをメインに据えるこ
とにした。開始時刻も遅らせ、午後5時以降の開催とし
た。昼間働きながら学校に通う生徒さんの多い定時制は、
午後4時に登校できる人は多くない。そこで授業終了後
に実施することになった。昇降口で声掛けを行ったこと

もあり25人の生徒さんの参加があった。今回食支援がメ
インにも関わらず、何人かの生徒さんが残って学生のみ
なさんとカードゲームに興じる場面や地域のみなさんと
会話をしている場面も見られた。

カフェや食支援の回数を重ねることで気軽に話ができ
る場が形づくられていることを強く実感した。また、授
業終了後、生徒さんが居場所を求めていることを確認す
ることができた会であった。生徒さんが自らのことを気
軽に相談できる場となればと思う。



困ったことがあったら
すぐご相談ください！

当会のLINE公式アカウント名
は「hsちば」です。

会員募集→
詳細はHPにて



公式LINE→
友だち追加



編集後記

いま様々ところで「居場所」がキーワードに挙げられています。4月からは高校生の居場所づくりが県の事業と
して始まろうとしています。hsちばの活動も新たな段階を迎えます。多くの方々の参加をお待ちしています。（三尾）

お詫び

広報第5号 p5 右段 19 行目「…できるだけく」の後に以下の内容を追加して訂正します。申し訳ございませんでした。
(19 行目終わりから) …できるだけたくさん、この生浜ライトカフェで、丁寧にすくい上げていけたらと考えています。